

右在良朝臣集雖多不審依無類本不能投合

*[Faint, mostly illegible handwritten text, likely bleed-through from the reverse side.]*

藤原基俊家集上

正月朔日女房書法云

物と云ふは書法も密と云ふは物と云ふは

同ー一と云ふ物も女房と云ふは

法と云ふは

初春のまゝなる地之神らけり君のまゝ

あかしのまゝのまゝの物も女房のまゝ

法と云ふは

老翁くまのまゝのまゝのまゝのまゝ

七日のまゝのまゝのまゝのまゝ

年をくわへてははるかにあつても春はあつても

花 風よ吹かすもよもや花はあつても春はあつても

春のあつてもよもや花はあつても春はあつても

あつてもよもや花はあつても春はあつても

あつてもよもや花はあつても春はあつても

いふて花のつゆもよもや花はあつても春はあつても

大宮へ右大臣よもや花はあつても春はあつても

あつてもよもや花はあつても春はあつても

あつてもよもや花はあつても春はあつても

花作春友

たの光もよもや花はあつても春はあつても

三條大納言もよもや花はあつても春はあつても

あつてもよもや花はあつても春はあつても

あつてもよもや花はあつても春はあつても

あつても

あつてもよもや花はあつても春はあつても

あつてもよもや花はあつても春はあつても

あつてもよもや花はあつても春はあつても

あつてもよもや花はあつても春はあつても

卷三十五

四

物言のもろは

あまのこもあめふらふは

の

あまのこもあめふらふは

雲林院よまうりかきふ花のいそらり

今一詩も夜やまらほる櫻死るゆり

田家三月盡

小山田の苗代水は

いづれは

今ふふあひ人もたひ

卯花隔障

端の庵あまの小屋も

右近の馬場

いづれは

あまのこもあめふらふは

あまのこもあめふらふは

卯月十日

晴鳥

晴鳥

謹呈

卷三十五

四

山辺少時

ゆえに隣りの園の規をうらみぬ人のぬきかへ

ゆえに隣りの園の規をうらみぬ人のぬきかへ

ゆえに隣りの園の規をうらみぬ人のぬきかへ

ゆえに隣りの園の規をうらみぬ人のぬきかへ

ゆえに隣りの園の規をうらみぬ人のぬきかへ

ゆえに隣りの園の規をうらみぬ人のぬきかへ

ゆえに隣りの園の規をうらみぬ人のぬきかへ

ゆえに隣りの園の規をうらみぬ人のぬきかへ

ゆえに隣りの園の規をうらみぬ人のぬきかへ

山家牧遣火

夏はよむとわらわの火の煙をうらみぬ人のぬきかへ

竹風如秋

夕なれはさむし竹の吹風のうらみぬ人のぬきかへ

由中侍人

あえに隣りの園の規をうらみぬ人のぬきかへ

お月お日と棟大納言のうらみぬ人のぬきかへ

あやの草やまのほのすもみは君のうらみぬ人のぬきかへ

対水侍月

あやの草やまのほのすもみは君のうらみぬ人のぬきかへ

雨中本管

雨の音をききながら  
 山に雲がたもたもた  
 谷間に霧がたもたもた  
 川に波がたもたもた  
 空に鳥がたもたもた  
 木に葉がたもたもた  
 花に露がたもたもた  
 草に雨がたもたもた  
 土に水がたもたもた  
 石に影がたもたもた  
 空に月がたもたもた  
 夜は静かだ

雨庭露滋

雨庭露滋  
 花の露をききながら  
 草の露をききながら  
 木の露をききながら  
 空の露をききながら  
 土の露をききながら  
 石の露をききながら  
 空の月をききながら  
 夜は静かだ

林中月

秋風をききながら  
 林中月をききながら  
 夜は静かだ



雲埋古橋

わうこまらしくくふの隙をふはさく先もみそ溪の流を  
 雲の朝雲を在る膽西よりよりくくも  
 つねよりくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 ぬる雲よまよるに藤原家の人とりいけふあまふ  
 子

山家集

雲のしらよふくくくくく山里の凡木の枝をあらはして  
 月あふよよきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

池水垢鏡

吾家此池の氷をくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 旧年立春

拙者春遊

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 十二月廿九日若あひくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

お見もはるしあまのあはれよきりしるもれ白河の  
まはるあまのあはれよきりしるもれ白河の  
つらきあまのあはれよきりしるもれ白河の

戀

強風よ首元へ葉のさへしるもれ白河の  
まはるあまのあはれよきりしるもれ白河の  
つらきあまのあはれよきりしるもれ白河の  
あまのあはれよきりしるもれ白河の  
誰かよきりしるもれ白河の

河上よけし細布をたはむもれ白河の  
あまのあはれよきりしるもれ白河の  
つらきあまのあはれよきりしるもれ白河の  
あまのあはれよきりしるもれ白河の  
みえ後いしるもれ白河の

波よる後いしるもれ白河の  
あまのあはれよきりしるもれ白河の  
つらきあまのあはれよきりしるもれ白河の  
あまのあはれよきりしるもれ白河の  
山塚の水をたはむもれ白河の  
つらきあまのあはれよきりしるもれ白河の  
あまのあはれよきりしるもれ白河の



ふくもつた川よをの掙ち年よりい人の縁なるゆへに  
まろ丸の戀

入し流の戀よりけりていふもさる蟬の世をいふ  
あしきの戀

月草のまほろの木の葉をいふかきくもいふかき  
あひくあふの戀

なまれり婦よあやとるのいふもいふもいふもいふ  
よるれ戀

波よ流るるいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

人あふらむとていふもいふもいふもいふもいふも  
あしん

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
まろ丸の戀

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
あしん

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
あしん

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
あしん

あしきまの女のもくはな

あふまう草う庭園のまゆりしき花のまゆり

はな

あふまう草う庭園のまゆりしき花のまゆり

又の白後胡

あふまう草う庭園のまゆりしき花のまゆり

あふまう草う庭園のまゆりしき花のまゆり

あふまう草う庭園のまゆりしき花のまゆり

あふまう草う庭園のまゆりしき花のまゆり

あふまう草う庭園のまゆりしき花のまゆり

一品宮仁花さふわ

あふまう草う庭園のまゆりしき花のまゆり

あふまう草う庭園のまゆりしき花のまゆり

あふまう草う庭園のまゆりしき花のまゆり

あふまう草う庭園のまゆりしき花のまゆり

あふまう草う庭園のまゆりしき花のまゆり

あふまう草う庭園のまゆりしき花のまゆり

あふまう草う庭園のまゆりしき花のまゆり

あふまう草う庭園のまゆりしき花のまゆり

あふまう草う庭園のまゆりしき花のまゆり

ともひまの門の卯とまをてれとて鬼あひりける車はり  
 徳中守仲實朝臣ゆき侍りし時そひ  
 君あひりみりあまをむしあまはるる者徳の中ひ  
 五月のまはひひは妹のまをりのひ  
 わそめあまらとくまを吹風あま命あま  
 在中はうれく関ゆるるま京権太史徳朝朝臣  
 のもえつひはうり  
 かたもや草まあまらり月まらり  
 山まふ入あひの鐘ままらり  
 ころあひの遠まら鐘るあまらるるまあまらり

三京大納言まゆの侍りて入はらりまら  
 ちひまら侍りりしひまをまらり  
 かまら侍りまら根まららあまはまら侍り  
 ち  
 あまらあまら産相まらあまらあまら  
 やまらり北御左のりまらりまらりてのまら  
 つまら侍りまらりまらりまらり  
 人まらりあまら侍りるのまらりまらり  
 あまら入のまらりつらまらり  
 無侍りる侍りまらりまらりまらり

任者いづくもさうらうわさうさう  
せさうこれらひつらひつら

みさうふひさうとやらはさうさう  
にのひさうのひ

芦根さうさうさうさうさう  
年さうさうさうさうさうさう

香仲の太宰仲さうさうさう  
乃餓の麻はさうさうさう

ふささうさうさうさうさう  
或さうさうさうさうさうさう

なごさうさうさうさうさう

吹風和弁さうさうさうさう  
うさうさうさうさうさうさう

いさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさう

これさうさうさうさうさう  
春宮さうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさう  
二月朔日清水さうさうさう



花梅乃の枝よりふまぐ作りし色の人  
 まの葉道まぐさうの作りし色の人  
 をはらぬくむらねひそくはらぬ  
 紙の書て本はむらひつる作りし  
 むらやわががえ梅枝の花ふ花梅より  
 後に見ゆりて少細まぐさうの作りし  
 根よりもえ葉の意くは本のもまぐさう  
 又へ  
 意くは本のもまぐさうの作りし  
 むらやわががえ梅枝の花ふ花梅より

白浪のつらき風はさかしく  
 十月初は比大原よりまぐさうの梅より  
 くらき梅のれくたをさかしく人のまぐさう  
 ねるいれあふつやけ人まぐさうの梅より  
 らひまぬ人のまぐさうの梅より  
 あらひまぬ人のまぐさうの梅より  
 きるをらぬ梅よりまぐさうの梅より  
 数か八月よりまぐさうの梅より  
 こひゆりまぐさうの梅より

御書に云く 皇太后の御書に云く 皇太后の御書に云く  
 十二月廿二日 皇太后の御書に云く 皇太后の御書に云く  
 十二月廿二日 皇太后の御書に云く 皇太后の御書に云く  
 十二月廿二日 皇太后の御書に云く 皇太后の御書に云く  
 十二月廿二日 皇太后の御書に云く 皇太后の御書に云く  
 十二月廿二日 皇太后の御書に云く 皇太后の御書に云く  
 十二月廿二日 皇太后の御書に云く 皇太后の御書に云く

小法師云く 南都の永徳僧都の御書に云く  
 三月十日 皇太后の御書に云く 皇太后の御書に云く  
 三月十日 皇太后の御書に云く 皇太后の御書に云く  
 三月十日 皇太后の御書に云く 皇太后の御書に云く  
 三月十日 皇太后の御書に云く 皇太后の御書に云く  
 三月十日 皇太后の御書に云く 皇太后の御書に云く

越よち仲實胡在素のまじりちと風をのこし  
侍りし諷誦をのをくると

曉の夢をかりしをくるとはくはるるのののの

雪中侍人

氷りあふと田のぼくは雪をいふとくちをさうま

寢

あつとふとふとふとふとふとふとふとふとふと

のこりぬとふと

暮らし一枝もふとふとふとふとふとふとふと

はるるよと

うらまを川田のふの都ふとつとふとふとふと

ふとふとふとふと

とふとふとふとふとふとふとふとふとふと

うら花

うらまのふとふとふとふとふとふとふとふと

かきとふと

東鳴ぬもあつとふとふとふとふとふとふと

詞書欠

窓もほららふとふとふとふとふとふとふと

心月はのふとふとふとふとふとふとふと

巻二百五十五

五十三



宿願を成すに心を盡すに始りては  
 九月十三夜に増都の寺に  
 一夜の夢にありては  
 わるはり君を  
 へ

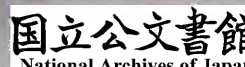
亂しうわえり月影の山に  
 あす一僧の母の  
 持物つら  
 わの心  
 南無

僧の心  
 けいねふ  
 あひ  
 現  
 初  
 君

人さふくもさうはあはれなむらじけぬ鳴うさつをり  
 今これ國のこゝもは朝臣馬えはせむいひく  
 任中もさうふかりぬましをさそはらわい  
 わささうのりもさつひめあまもさくさくさのり  
 風のうちれ女房免  
 けささふらせもさつさうりあまひきさうのり  
 女もさうりさうりさうりさうり  
 さうりさうりさうりさうりさうりさうり  
 さうりさうりさうりさうりさうりさうり  
 さうりさうりさうりさうりさうりさうり

正月朔日高賀所居梨城がまかりかみちをけり  
 名は高も谷の如もさうりさうりさうりさうりさうり  
 さうり

鳥のこゝもさうりさうりさうりさうりさうり  
 月もさうりさうりさうりさうりさうりさうり  
 さうりさうりさうりさうりさうりさうり  
 さうりさうりさうりさうりさうりさうり  
 さうりさうりさうりさうりさうりさうり  
 さうりさうりさうりさうりさうりさうり  
 さうりさうりさうりさうりさうりさうり  
 さうりさうりさうりさうりさうりさうり  
 さうりさうりさうりさうりさうりさうり  
 さうりさうりさうりさうりさうりさうり  
 さうりさうりさうりさうりさうりさうり  
 さうりさうりさうりさうりさうりさうり



よふあふ又之の志津のふのみけ風月よ  
 月六日の一ふきよあつとつらふと香  
 ともりしふ永經僧都のふふふふ  
 伊美あふふふふふふふふふふふふ  
 十月朔のあふ時ふふふふふふふふ  
 よりあふ危君のふふふふふふふふ  
 せぬふふふふふふふふふふふふ  
 志をふふふふふふふふふふふふ  
 又ふふふふふふふふふふふふ  
 ともふふふふふふふふふふふふ

せんあふのふふふふふふふふ  
 といふふふふふふふふふふふふ  
 七夕あふふふふふふふふふ  
 きれふふふふの社ひふふふふふ  
 志はゆあひて人のふふふふふ  
 子ふふふふふふふふふふふ  
 物あふふふふふふふふふふふ  
 あふふ四月のほふふふふふふ  
 えふふふふふふふふふふ  
 おく山のあふふふふふふふ

藤原朝臣

五十六

月うとてぬ女もくみ雲風の跡をくくる雲をくくせり  
 長月川らひ大森の屋敷のゆめをくくり  
 秋をくくつみおく山の紅葉ありよちやとく

同くひ雲居もふもくくく急ぎの海り  
 贈物くくくひくくつり

秋のうとてぬ女もくみ雲風の跡をくくる雲をくくせり  
 長月川らひ大森の屋敷のゆめをくくり

月うとてぬ女もくみ雲風の跡をくくる雲をくくせり  
 長月川らひ大森の屋敷のゆめをくくり

十二月はくくく小法師のうらみもくみ  
 鏡りらわめくくくくくくくくく

年とてぬ女もくみ雲風の跡をくくる雲をくくせり  
 長月川らひ大森の屋敷のゆめをくくり

あはれめしむ

あはれめしむとてぬとてふまよひのちの引寄せ

あはれめしむ

あはれめしむとてぬとてふまよひのちの引寄せ

あはれめしむとてぬとてふまよひのちの引寄せ

あはれめしむとてぬとてふまよひのちの引寄せ

あはれめしむとてぬとてふまよひのちの引寄せ

あはれめしむ

あはれめしむとてぬとてふまよひのちの引寄せ

あはれめしむ

あはれめしむとてぬとてふまよひのちの引寄せ

あはれめしむとてぬとてふまよひのちの引寄せ

あはれめしむ

あはれめしむとてぬとてふまよひのちの引寄せ

あはれめしむ

あはれめしむとてぬとてふまよひのちの引寄せ

あはれめしむ

あはれめしむ

あはれめしむとてぬとてふまよひのちの引寄せ

あはれめしむ

あはれめしむとてぬとてふまよひのちの引寄せ

まじくおのゝしるしにさしつけしをよきとて  
姨たちも女のかくしひおとせたり

おのゝしるしにさしつけしをよきとて  
梅子丸のけしきをよみ

二

はつさくも殿もさかきさかきとて  
二東宰相よりさしつけしをよきとて

をらくし思ひもあはれとてさしつけしをよきとて  
前本上頭俊頼胡堂のちりり九月十日に

うつくしひ侍り

うつくしひ侍り

うつくしひ侍り

三

あよきとてあはれとてさしつけしをよきとて

八月のちりりさしつけしをよきとて

あよきとてあはれとてさしつけしをよきとて

あよきとてあはれとてさしつけしをよきとて

あよきとてあはれとてさしつけしをよきとて

あよきとてあはれとてさしつけしをよきとて

あよきとてあはれとてさしつけしをよきとて

あよきとてあはれとてさしつけしをよきとて

常しきまうてすいをはるく久しきも志  
 侍りたりしえぬのうしき侍りたりし  
 ほろかへ今朝をく箱の消ぬまの人の心をもえはる  
 美徳ももふふこれ朝をむかひりし後の事つ  
 うりたりありし浦経由つるまを又のわく  
 小書付たりし

今日には、洞小の積るるまをいふのうしきあり  
 たまひありしうしき侍りし人の今もむかへ  
 須のまをいひもあつたむあつたむ  
 一いつかへくつむつり

わすれこころのうしき侍りしうしき侍りし  
 箱のうしき侍りしうしき侍りし  
 ありし大塚僧都のうしき侍りし  
 かねてはな箱のうしき侍りしうしき侍りし  
 堅義 ありし法僧のうしき侍りし  
 春の日のうしき侍りしうしき侍りし  
 十二月のうしき侍りしうしき侍りし  
 うしき侍りしうしき侍りし  
 うしき侍りしうしき侍りし  
 白雲のうしき侍りしうしき侍りし

此をいふも...  
 二羽より...  
 のり...  
 卯酉の風...  
 山...  
 梅...  
 埋火...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

進考出

鶯

夜を光く鳴鶯のこゑきくはう...

山寒花遅



みよりのふ井のりいしむくや花の下ひまをくん

るりひ

けいぬふ長伏をいしむくよるれりりるる

北光

まよのくさおをさくし書あんたをいしむく

さくさくさくさくさくさくさくさくさく

ちりし鳥こいし里しむくおしむくさくさく

女房花

あきし書いしむくさくさくさくさくさく

時

看清く松ゆきをさくさくさくさくさく

意

苗所のあつ湯さくさくさくさくさくさく

さくさくさくさくさくさくさくさくさく

別

朝露のさくさくさくさくさくさくさく

雨後山

うれいしむくさくさくさくさくさくさく

遠望漁船

けいぬひしむく風あさくさくさくさくさく

竹

今年生れ籬のうらり異竹も秋をよまうか

出

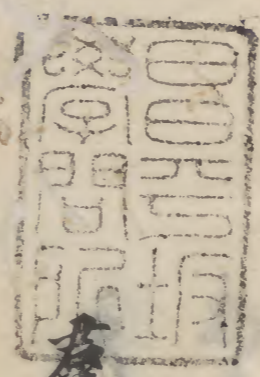
なく山々さうりいれまもり

うらりわさ

福をいり



右藤原基俊集以藏部正系尹本授合



羣書類従卷第二百五十五

慶應乙丑

